# 如来蔵思想と慈悲

鈴 木 隆 泰

# 1. 如来蔵思想の誕生

先行研究によってすでに明らかにされているように、『如来蔵経(Tathāgatagarbhasūtra, TGS)』によってはじめて正式に表明された如来蔵思想は、 初期経典に説かれる「自性清浄心、客塵煩悩染」を淵源とし、直接には、 「如来出現」の意義を十相にわたって説く『華厳経・如来性起品(Tathāgatotbattisambhavanirdeśa, TUSN)』(以下,『性起品』と呼称) の「法身顕 現」「如来智の遍在」を受けて形成されていったものとされる。『性起品』 における如来は、成覚や入滅等を超越した法身 dharmakāva を意味して おり、その出現 utpatti, sambhava とは、衆生に対する大慈悲に基づき、 如来のあらゆる救済業が法身の等流として顕現することを表している。こ の経においては、如来の事業である成覚も入滅も、法身としての不可見の 如来が、衆生利益を目的として仮に世間に姿を顕し出したもの、すなわち、 如来の慈悲業の一つと理解されている。そして『性起品』の所説のうち、 如来蔵思想成立の直接の契機となったものは、第四相「如来の意業」第十 喩中にある。「三千大千世界を一微塵に含む」という譬喩に示された「如 来智の遍在」である。この譬喩では、「如来の慈悲業に基づき、一切衆生 を利益する如来智 tathāgatajñāna が衆生の内に例外なく滲透しているに 如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰) -141も関わらず、想念にとらわれている衆生は自らの内に如来智があることに 気がつかず、その結果、如来智が顕れ出ないままになっている。そこで如 来は方便を巡らし、それまで役に立っていなかった、衆生の内なる無量の 如来智を働かしめ、世間を利益させる。」と説かれており、衆生を利益す る如来の慈悲が強調されていることが分かる。このように、如来蔵思想は その形成・成立の経緯から見て、如来の慈悲業を大前提とした思想である と言うことができる。

# 2. 如来蔵思想-如来法身の一切衆生への内在

上記のような背景をもって誕生した如来蔵思想は、如来の慈悲に基づい て一切衆生に「将来、如来となるべき因 hetu. dhātu がある」「如来法身 tathāgatadharmakāya が内在している」と提唱する。ところがこの思想 においては、如来の慈悲業の顕現が「如来法身の一切衆生への内在」とし て極まった余り、「菩提への歩みを助け違く」という従来の意味での加来 の慈悲業がかえって影を潜めたように思われるのである。もちろん、如来 の慈悲業に基づく「一切衆生への如来智の内在」は、『如来蔵経』成立の 直接の契機となった『性起品』において、すでに示されてはいた。しかし そこでは同時に、現時点では役に立っていない衆生内の如来智を役立たせ る如来の慈悲業, すなわち, 「菩提への歩みを助け導く, 如来の慈悲業の 顕現」が強調されていた。ところが如来蔵思想では、如来の慈悲業は「如 来法身の一切衆生への内在」としてすでに実現してしまっている。この、 衆生に内在する如来法身は、煩悩とともにあり、如来業を十分に発揮でき ない「有垢真如」「在纒位の法身」という未完成態にとどまっているにも 関わらず、本質的に真如・如来法身である点において、完成態としての如 - 142 - 如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰)

来と異なるところはないとされる。したがって衆生は、自らに内在する有 垢真如としての如来法身の存在をもって、如来の慈悲業を究極的なかたち で、しかも先天的に手に入れたことになり、その反面、従来の「菩提へと 歩む衆生を助け導く、如来の慈悲業の顕現」は、どうしても前面に表出さ れることが少なくなってきたものと考えられるのである。そしてそれと呼 応するかのように、如来蔵思想は以前まで一般的でなかった課題を抱える こととなっていく。それらを大別すれば、

- ・法身の清浄と染汚に関わる問題:第一の課題
- ・すでに如来法身を獲得している凡夫の,修行に関わる問題:第二の課 題

この二課題にまとめることができると思われる。以下,章を改めて**両課題** を見ていくこととする。

# 3. 如来蔵思想が抱えた二つの課題

#### 3-1. 第一の課題

先に触れたように、如来蔵思想における衆生の内なる如来法身は、真如・法身でありながら、煩悩に取り巻かれた「有垢真如」「在纒位の法身」とされる。本節では、如来蔵思想を代表する経典である『不増不減経(Anūnatvāpūrnatvanirdesa, AAN)』と『勝 鬘 経(Śrīmālādevīsimhanādasūtra, ŚMS)』の所説を引用しながら、第一の課題について考察を進めていくこととしよう。まずは『不増不減経』の所説である。

シャーリプトラよ, この同じ法身 dharmakāya が, 無量億の煩悩の被膜に覆われ, (中略) 生死を経巡っている間は, 衆生界 sattva-dhātu と呼ばれる。(*RGV* 40. 16-18)

如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰) -143-

シャーリプトラよ、勝義諦というのは衆生界の別名である。衆生界というのは如来蔵 tathāgatagarbha の別名である。如来蔵というのは法身 dharmakāya の別名である。(*RGV* 2. 11-13)

シャーリプトラよ, それゆえ衆生界と法身とは別物ではない。衆生 界こそが法身であり, 法身こそが衆生界なのである。両者は内実に関 して不二であって, ただ単に文字が違っているに過ぎない。

(RGV 41. 15-17)

法身は常住である。(中略) 法身は堅固である。(中略) 法身は寂静である。(中略) 法身は恒常である。(*RGV* 54. 12-15)

以上の引用から『不増不減経』においては、如来蔵は無量の煩悩に覆われてはいるが、「常住 nitya・堅固 dhruva・寂静 śiva・恒常 śāśvata」という〈四句〉によって形容される如来法身とは、単に名称が相違しているだけで、その本質は全く変わるところがないとされていることが分かる。次に、『勝鬘経』の所説に移ることとする。

[勝鬘夫人]「世尊よ,存在の消滅が苦の滅なのではありません。苦滅 [諦] の名において,(中略)常住・堅固・寂静・恒常であり,本来清 浄にして,一切の煩悩の殻から離脱し,ガンジス河の砂の数を超える, 不可分,智と離れない,不可思議なブッダの諸徳性をそなえた如来法 身 tathāgatadharmakāya が示されています。そしてこの同じ如来法 身がまだ煩悩の覆いから離脱していないとき,如来蔵 tathāgatagarbha と呼ばれるのです。」(*RGV* 12. 10-14)

[勝鬘夫人]「世尊よ, 法身こそ如来なのです。」(RGV 56.4) [勝鬘夫人]「世尊よ, 如来蔵は生まれることも, 老いることも, 死ぬことも, 輪廻することも決してありません。(中略) 如来蔵は有為の

相の境界を超えており、常住・堅固・寂静・恒常だからです。」

144 — 如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰)

以上の引用より、『勝鬘経』における如来蔵も『不増不減経』の場合と同様に、煩悩の覆いから離脱していないにも関わらず、「常住・堅固・寂静・恒常」という〈四句〉によって形容されうる、有為の相の境界を超えた如来(=如来法身)そのものであることが知られる。では、その如来蔵(如来法身)と煩悩との関係について、引き続き『勝鬘経』の所説を見ていこう。

[勝鬘夫人]「如来蔵は、分離した、智と離れた一切の煩悩の庫蔵については空です。一方、ガンジス河の砂の数を超える、不可分、智と離れない、不可思議なブッダの諸徳性については不空です。」

(RGV 76. 8-9)

如来蔵は、煩悩とともにありながらも本質的には結びついておらず、不可思議な仏徳を失うことはないとされている。しかし、それでもなお、如来蔵は煩悩の覆いを脱しておらず、本来清浄であるにも関わらず煩悩によって染汚されているのはなぜか。この第一の課題は、「如来法身の内在」という如来蔵思想の根本的構造に起因しているため、ひとえに『勝鬘経』だけにとどまるものではなく、この思想全般に見られる共通の課題であった。そこで、如来蔵思想の理論化に努めた『勝鬘経』は、この第一の課題の解決に向けた説明原理を模索している。

[勝鬘夫人]「世尊よ、それゆえ如来蔵は、「如来法身である如来蔵と本質的に」結合し、不可分、智と離れない無為の諸法にとっての所依 niśraya・支え ādhāra・基盤 pratiṣṭhā です。世尊よ、さらにまた、 [如来蔵と本質的には〕結合しておらず、分離した、智と離れた有為 の諸法にとっても、所依・支え・基盤であるものは如来蔵なのです。」 (RGV 73.2-5)

如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰) -145-

[勝鬘夫人]「世尊よ,もし如来蔵がなければ,[衆生は]苦を厭うこともなく,涅槃を願い,求め,欣求することもないでしょう。」

(*RGV* 73. 7-8)

[勝鬘夫人]「世尊よ,如来蔵があるとき輪廻もある,というのは,この語にとって相応しいものです。」(RGV 73.6)

この引用から知られるように、『勝鬘経』は、如来蔵を無為法と有為法 双方にとっての所依(いわゆる「染浄依持の如来蔵」)とすることによっ て、如来蔵思想の抱える第一の課題を解決しようと試みている。しかし、 如来蔵が「浄依持」であることは理解しやすいとしても、なぜ「染依持」 であるのかは容易には納得されないことがらである。結局、『勝鬘経』は 第一の課題に最終的な解答を出すことができないまま、次のようなかたち で論を打ち切らざるをえなかった。

[勝鬘夫人]「如来蔵に関する智こそが、諸々の如来の空性智なのです。 そして如来蔵は、一切の声聞・独覚によっては、いまだかつて見られ たことも理解されたこともありません。」(RGV 76.15-16)

[勝鬘夫人]「世尊よ,本来清浄である心が煩悩に汚されるという意味は難解です。」(*RGV* 15.6-7)

[世尊]「夫人よ、この二つの法は洞察しがたい。すなわち、本来清浄である心も洞察しがたく、その同じ心が染汚していることも洞察しがたい。(中略)この二つの法については、ただ如来を信ずるよりほかはない。」(RGV 22. 1-4)

このように『勝鬘経』は、清浄な法身がなぜ煩悩に染汚されるのかは説明不可能であり、ひたすらに如来を信ずるほかはないとして、**第一の課題**についての明確な解答を回避・放棄している。結局、**第一の課題**は未解決のまま、来たるべき経論へとその解決が委ねられることとなったのである。

146 — 如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰)

## 3-2. 第二の課題

一方,如来法身の一切衆生への内在を主張する如来蔵思想が抱えるに至ったもう一つの課題が,「すでに如来法身を獲得している凡夫の,修行に関わる問題」であった。以下,如来蔵 tathāgatagarbha を,成仏の因dhātu なおかつブッダの本質 dhātu という観点から,果的側面の強い「仏性 buddhadhātu」というタームではじめて読み代えた『涅槃経』の所説に基づき,この第二の課題について見ていくこととする。まず,『涅槃経(Mahāparinirvāṇasūtra, MPNS)』前半部の第一類(主題は如来常住)の所説である。

我(アートマン)とはブッダという意味である。常とは法身という 意味である。楽とは涅槃という意味である。浄とは法の別名である。 (MPNS<sub>7</sub> 32b4-5)

『涅槃経』がアートマンの持つ自在性という特性を利用して,ブッダの自在性を表現している箇所である。一方,後半部の第二類(主題は如来蔵・仏性)では、この所説は次の主張に移し代えられる。

我(アートマン)とは如来蔵という意味である。(MPNSr 105b5) ここではアートマンを,衆生の内なる如来蔵・仏性に対して適用しており,先の記述と併せることで,『涅槃経』における衆生の内なる如来蔵・仏性が,完成態としてのブッダと等置されていることが分かる。このことは,次の引用文からも確認される。

唯一のものに帰依しなさい。(中略) ブッダこそが法でもありサンガでもあり、如来だけで三宝なのである。(中略) アートマンという [内なる] ブッダに帰依して一体となるべきである。それからブッダそのものになって如来の威力をなすがよい。(中略) いかなる衆生であれ、如来蔵を体得しようとこの経典を信じる者たちは、自らが三帰

如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰) -147-

依なのである。(中略) 三宝帰依は不要である。なぜかと言えば,〔自 らの内に〕如来蔵・仏性が存在するからである。

 $(MPNS_T 111a1-112a7)$ 

したがって『涅槃経』第二類においては、内なるブッダを有する衆生の価値がブッダと同じ位置にまで上昇させられているのである。この状況下では、「すでにブッダを獲得している衆生が、さらに成仏を目指して仏道修行をする必要はあるのか」という問いが出てくることも当然であり、かくして「修行無用論」という、宗教倫理にとっての危機的状況が生み出される一要因ともなっていったと考えられる。そこで『涅槃経』は、「貪著する者」を原義とする「一闡提 icchantika」の概念を再解釈し、「いかに自らに仏性(=ブッダそのもの)が内在しているとはいえ、仏道修行をしない限りその者は一闡提であり、成仏不可能者である」という宗教倫理構造を確立し、第二の課題に対処しようとしたのである。

一切衆生には仏性があって、その〔仏〕性は各自の身体に内在しており、諸々の衆生は数多の煩悩を滅ぼして後にブッダとなるのである。ただし一闡提はその限りではない。(MPNS<sub>7</sub> 99a6-7)

この「一闡提を内に含む宗教倫理構造」は、『涅槃経』の強い影響下に成立した『央掘魔羅経(Angulimālīyasūtra, AMS)』にはかろうじて受け継がれることとなる。ただし、それがいかに実践道を回復・維持するための便法であったとはいえ、一闡提という成仏不可能者を例外的に認めることは、"如来の慈悲に基づいて、一切衆生に如来法身が内在しているために、衆生は「誰もが例外なく成仏可能」という意味において先天的に利益されている"という,如来蔵思想の根本理念・構造と相反してしまうものでもあった。そのため、一部の例外を除き、後続する諸経論や、果ては『涅槃経』の内部においてさえ、いわゆる「闡提成仏」の主張へと路線が転換さ

148 — 如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰)

れていく。その結果、一旦は獲得されたかに見えた**第二の課題**解決への糸口は手放されてしまい、再び未解決の状態へと後戻りすることとなったのである。

# 4. 結びにかえて

『央掘魔羅経』の他に、『涅槃経』の強い影響下に成立した経典がもう 一つ存在する。それが『大法鼓経(Mahābherīsūtra, MBhS)』である。『大 法鼓経』は、『大雲経 (Mahāmeghasūtra, MMS)』『涅槃経』『央掘魔羅経』 とともに涅槃経系経典群を形成しており、さらに、成立時期・思想的発展 のどちらの面からも、この経典群の末尾・終極に位置している。そして涅 繋経系経典群の最後尾を飾るにあたり、『大法鼓経』は、これまで未解決 であった第一,第二両課題双方の同時解決を試みている。しかも管見によ る限りでは、両課題の解決に成功したおそらく唯一の経典と呼んで差し支 **えないと思われる。本来ならばここで『大泆鼓経』の考察へと入っていく** べきところではあるが、残念ながら、もはや筆者に与えられた紙面が尽き てしまった。『大法鼓経』の採用した解決法のみを簡略に述べるならば、 それは「衆生の内なる如来法身の放棄」であった。なるほど、両課題の発 端が一切衆生への如来法身の内在にあった以上、その内在する法身を放棄 することによって課題が解決できることは、ある意味自明の理であろう。 しかしそれは同時に、如来の慈悲業の究極形態として如来法身を一切衆生 に抱え込ませ、それによって一切衆生の成仏可能性を保証しようという, 如来蔵思想の根本理念そのものの否定にも繋がってしまう。この難関をク リアした上で、 両課題の同時解決を目指した『大法鼓経』の教説について は、現在準備中の別稿において詳しく論じているので、そちらでの議論を

## もって、小論の結びにかえさせていただくこととしたい。

#### 〈略号及び使用テクスト〉

AAN Anūnatvāpūrnatvanirdeśa (『不增不減経』).

AMS Aṅgulimālīyasūtra (『央掘魔羅経』).

LAS Laṅkāvatārasūtra (『楞伽経』), ed. B. Nanjio, Kyoto, 1956.

MBhS Mahābherīsūtra (『大法鼓経』).

MMS Mahāmeghasūtra (『大雲経』).

MPNS Mahāparinirvānasūtra (『涅槃経』).

 $MPNS_T$  Tibetan version of the MPNS, P No. 788.

MPNS<sub>c2</sub> Second Chinese version of the MPNS, T. No. 374.

RGV Ratnagotravibhāga-mahāyānottaratantraśāstra (『宝性論』), ed. E.

H. Johnston, Patna, 1950.

**SMS Srīmālādevīsimhanādasūtra** (『勝鬘経』).

TGS Tathāgatagarbhasūtra (『如来蔵経』).

TUSN Tathāgatotpattisambhavanirdeśa (『華厳経・如来性起品』).

P Peking Kanjur T. 『大正新脩大蔵経』

#### (参考文献)

辛島静志 [2006] 一闡提 (*icchantika*) は誰か,『法華経と大乗経典の研究』,東京:山喜房佛書林,pp. 253-269。

下田正弘 [1997] 『涅槃経の研究―大乗経典の研究方法試論―』,東京:春 秋社。

鈴木隆泰 [1996] 『大法鼓経』の研究序説―構成,及び経題に関して―, 『仏教文化』35 (学術増刊号 9 ),pp. 2-22。

> [1997] 如来常住経としての『大法鼓経』,『仏教文化研究論集』 1, pp. 39-55。

[2000a] 涅槃経系経典群における空と実在,『東洋文化研究所紀 要』139, pp. 109-146。

[2000b] 如来蔵系経典の宗教倫理構造,『日本仏教学会年報』65, pp. 77-91。(『仏教における善と悪』,日本仏教学会編, 京都:平楽寺書店,2000年,pp. 77-91再所収)

[2001] 涅槃経系経典群の研究(東京大学提出博士学位請求論

<sup>- 150 -</sup> 如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰)

文), xxiii+522p。

- 高崎直道 [1958] 『華厳経・如来性起品』と『宝性論』,『如来蔵思想II』 (1989) 再所収, 京都: 法蔵館, pp. 124-130。
  - [1960] 華厳教学と如来蔵思想―インドにおける「性起」思想の 展開―,『如来蔵思想II』(1989) 再所収, 京都: 法蔵館, pp. 70-123。
  - [1974] 『如来蔵思想の形成一インド大乗仏教思想研究一』,東京:春秋社。
  - [1975a] 如来蔵・仏性思想,『如来蔵思想 I』(1988) 再所収,京都: 法蔵館,pp. 3-35。
  - [1975b] 『如来蔵系経典(大乗仏典12)』,東京:中央公論社。
  - [1977] 大乗の諸仏と如来蔵思想,『如来蔵思想 I』(1988) 再所 収,京都: 法蔵館,pp. 78-96。
  - [1978] 如来蔵思想と縁起,『如来蔵思想 I』(1988) 再所収,京 都: 法蔵館, pp. 181-206。
  - [1989] 『宝性論』,東京:講談社。
- 藤井教公 [1991] 大乗『涅槃経』におけるアートマン説,『〈我〉の思想』, 東京:春秋社, pp. 123-137。
- Suzuki, T. [2002] The Buddhology in the *Mahābherīsūtra* Inherited from the *Saddharmapuṇḍarīka*, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 100 (50-2), pp. 20-24.

#### 注

- (1) 如来蔵思想の形成に関する代表的研究として、高崎「1974」を挙げる。
- (2) 高崎「1975a:21-22]。
- (3) 『性起品』については、高崎[1958][1960][1974:574-602]参照。
- (4) RGV 22. 10-24. 8。本稿におけるサンスクリット文の引用に当たっては、原典の散逸している資料も多いという事情に鑑み、適宜『宝性論(Ratnagotravibhāga-mahāyānottaratantraśāstra, RGV)』を用いることとする。『宝性論』からの和訳、および解釈に際しては、高崎[1989]を参考にした。
- (5) 高崎「1974:592]「1975a:16-17]「1989:252]。
- (6) 高崎 [1958:129-130] [1974:576-577]。
- (7) 有垢真如 samalā tathatā については『宝性論』第一章に詳説される (*RGV* 25. 18-78. 22, 高崎「1989: 44-138〕)。
- (8) aparyantakleśakośakotigūdhas tathāgatagarbhaḥ (RGV 59. 14);

- ayam eva ca bhagavaṃs tathāgatadharmakāyo 'vinirmuktakleśakośas tathāgatagarbhaḥ sūcyate (RGV 12. 14). 高崎 [1975a:15] 参照。
- (9) tannairmalyasyādvayatvāt prakṛtyā (*RGV* 26. 2); tathatāvyatibhedatah (*RGV* 26. 5); tathāgatatathatāvyatibhedārthena (*RGV* 26. 8).
- (10) 高崎 [1975a:14] 参照。如来蔵思想においては、衆生は例外なく先天的に利益されていることになる。
- (11) 高崎「1974:39-127]「1977:79-81]。
- (12) 元来,如来や涅槃の形容句である〈四句〉は,如来蔵系経論においても如来法身を表現する際に好んで用いられる。*RGV* 20.9-10,53.9-54.15,83.12-17,84.7-10,84.20-21,高崎[1987:299-300],下田[1997:243]参照。
- (13) 高崎「1974:69-96]。
- (14) 高崎「1974:107,111]。
- (15) 高崎「1974:64]「1975b:422-424]「1982:24-27]。
- (16) 高崎 [1974:89, 106-107] [1978:196-197] [1982:26], 下田 [1997:318-319]。
- (I7) 『楞伽経』に見られる如来蔵とアーラヤ識の同一視 (*LAS* 220. 13-14, 223. 10-13) は、その成否はさておき、如来蔵思想の「**第一の課題**」に対する解答例の一つと見なすことができるであろう。高崎 [1974: 120-121] [1982: 26-27] 参照。
- (18) 『涅槃経』に関する代表的研究として、下田「1997」を挙げる。
- (19) 藤井 [1991:125-130], 下田 [1997:218]。
- (20) 下田 [1997: 278-291, 302] は、『涅槃経』において「如来蔵・仏性=ブッ ダ」が成立した背景に、ブッダの遺骨 dhātu をブッダそのものと見なす仏 塔信仰があると述べる。
- (21) 鈴木「2000b:78]。
- (22) 下田 [1997: 356-378], 鈴木 [2000b: 80-82] 参照。一方, 辛島 [2006] は宗教倫理の視点に基づく一闡提理解を採用していない。
- (23) 鈴木「2000b: 82-85]。
- (24) 『宝性論』(*RGV* 37.1-9), 『楞伽経』(*LAS* 66.12-67.1), 及び曇無讖訳『涅槃経』の十一巻以降(*MPNS*<sub>C2</sub> 428b 以降)に確認される。下田 [1997:331], 鈴木 [2000b:90] 参照。
- ② 鈴木 [1996] [1997] [2000a: 131-137] [2001: 349-429, 435-437, 470-472], Suzuki [2002]。
- (26) 2007年度刊行予定の『東洋文化研究所紀要』に投稿済である。
- 152 如来蔵思想と慈悲(鈴木隆泰)